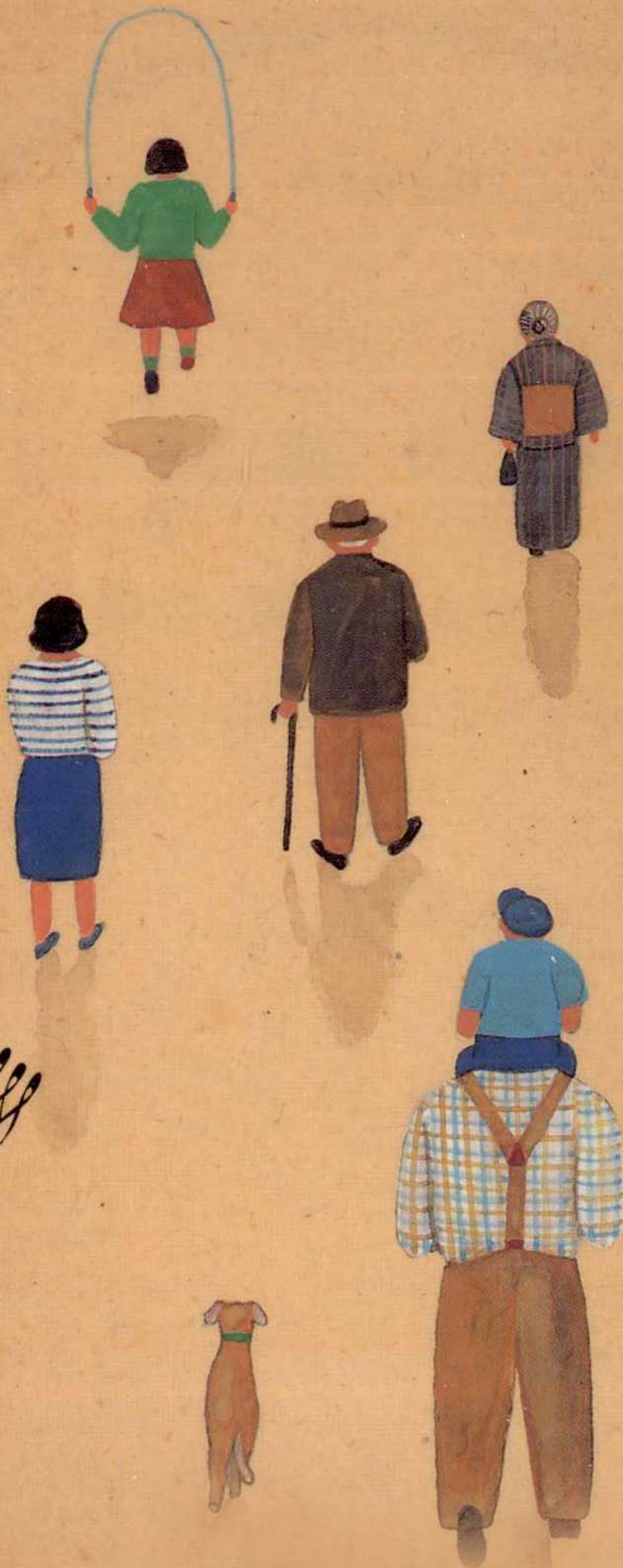


# 家族の絆

きずな

椎名誠選



日本ペンクラブ編

## 家族の絆

選者 しい椎名 まこと 誠

1997年6月20日 初版1刷発行

発行者 森 元 順 司  
印刷 堀 内 印 刷  
製本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-11 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© The Japan P.E.N.Club 1997

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72410-8 Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

江苏工业学院图书馆

藏書章

椎名 誠選／日本ペンクラブ編



# 目次

力

宮本輝

7

意気地なし

藤沢周平

25

恥の譜

三浦哲郎

59

春が来た

向田邦子

89

白雲悠々

檀一雄

127

胸

三木卓

151

百

色川武大

177

汚点<sup>しみ</sup>

井上ひさし  
203

海の幸

高井有一  
241

伝法水滸伝

山口 瞳  
273

月の光

井上 靖  
311

誘拐横丁

筒井康隆  
373

きんもくせい

椎名 誠  
403

選者解説

椎名 誠  
424



力

宮本  
輝

みやもと  
**宮本 輝**てる

一九四七年、神戸市に生まれる。追手門学院大学文学部を卒業して広告会社のコピーライターに。七七年に『泥の河』で太宰治賞、つづいて『螢川』で芥川賞を受賞する。これらとともに川三部作をなす『道頓堀川』ほかで、幸薄い庶民の運命を叙情溢れる筆致と巧みな物語性で描き出していった。代表的長編に、生と死の極限の姿を凝視する『錦繡』、吉川英治文学賞を受賞した『優駿』、全五部で完結となる大河小説の『流転の海』など。

少年の漕ぐ自転車<sup>こ</sup>が、枯葉を巻きあげて、噴水の向こうに消えていった。西陽<sup>にしび</sup>は雲にさえぎられて公園を暗くさせ、ベンチに坐<sup>すわ</sup>っていた人々の腰をあげさせた。私も、そろそろ帰ろうと思った。夕暮が失意のひとつの象徴のように公園を侵蝕<sup>しんしょく</sup>し始めている気がして、ここちよい筈<sup>はず</sup>の秋の風も不快な寒気<sup>さむけ</sup>をもたらしてきた。腰をあげようとしたとき、隣に坐っていた老人が、「お仕事、大変ですな」

と言った。老人はまだ秋だというのに、毛糸の手袋をはめていた。ステッキを持ち、ズック靴<sup>ぐつ</sup>を履<sup>は</sup>いていた。猫背<sup>ねこぜ</sup>で、そのうえ着ている濃い灰色のジャンパーはかなり年代物らしく、袖口<sup>ぐち</sup>がほころびていたから、私は、ああ、夕暮の公園には、いつもこんな貧しそうな老人が、何人か坐っていると思い、なるべく目が合わないよう、わざと背を向ける格好で坐っていたのだ。だが、突然話しかけられると、知らぬふりをして立ち去ってしまうわけにもいかず、

「……そうですね」

と答え、老人のほうを振り返った。けれども、話相手をさせられるのは迷惑だったから、老

人の目を見ず、ステッキに視線を落とした。ステッキの柄えの部分には金の飾り具が巻かれ、象牙細工も施されていて、それがかなりの上物であることを示していた。私は改めて、老人の着ているものに視線を走らせた。使い込んで、それぞれ傷いたんではいるものの、ジャンパーも手袋もズボンも、みな安物ではなかった。

「お日さんが落ちてのうても、雲に隠れると、どういうわけかみんな公園から出て行きます。春でも夏でもねエ。不思議ですなア」

老人がそう言った途端、また西陽がさした。枯葉もベンチも、老人のズック靴も茜色あかねいろになった。私もまた茜色に染まっているのであろう。

「元気が失なくなったときはねエ、自分の子供のときのことを思い出してみるんですよ。これが、元気を取り戻もどすこつですなア」

「元気がないように見えますか？」

老人は私の問いに、ただ笑顔で応じただけで、あとは何も言わず、ゆっくりと立ちあがり、小さく頭を下げ、一步一步枯葉の道を踏みしめるようにして遠ざかって行った。確かに、私はその日一日、元気がなかった。そうでなければ、休日でもないのに、夕暮の公園のベンチで時を過ごしたりはしない。私を萎なえさせているものはたくさんあった。寝不足、決まりかけていた商談の決裂、妻の流産、三歳の長女が、隣人の買ったばかりの新車に釘くぎで無数の線を刻んでしまったことに対する弁償金の捻出。しかし、それらはたまたまいちどきに重なり合っただけ

で、人生にはよくある些細な不運に過ぎず、どれも解決のつかない事件ではなかった。それなのに、私はひどく気落ちしていた。人生に敗れたことをはっきり自覚した人みたいに、もしくは、意志とは裏腹に、ある悪魔的な力に操られて犯罪を犯してしまった人のように、深い失意に包まれ、会社を出ると予定していた得意先には足を運ばず、喫茶店で時間をつぶし、とぼとぼ路地を歩きまわり、いつしかこの公園にやって来たのだった。

殆ど人のいなくなった公園のベンチに再び腰を降ろし、煙草を吸った。あと二十分くらいは、陽がさしているだろうと考えた。もうその姿を、噴水の向こうのポプラ並木の奥に消してしまった老人に、私は憎悪の感情を抱いた。彼は、元氣のない人間をみつけるために、公園のあちこちを散策し、悪意に満ちた視線を配ることを日課にしているのに違いないと思ったのだ。そして獲物がみつかるかと近づいて行き、ますます生命力を喪失させる方法をそつと耳打ちするのだ。——子供の頃の自分を思い出しなさい、と。無垢であった時代、未来に幸福しか想い描かなかった時代、雨も雷も、耐え難い暑さや寒さも、己れを庇護してくれる者のふところにもぐり込める格好の材料であった時代。そんな時代の自分を思い起こすことが何になろう。そんな時代に還れる筈はなく、郷愁は失意におもしを乗せるだけではないか。そう思いながらも、私の心の中には、やがてぼんやりと、自分の幼かった頃のことや浮かび出て来た。けれども、それはどうしても鮮明な映像にはならなかった。どれもこれも、霧の彼方の浮遊物のように、気味悪く揺れるだけである。子供の頃の思い出といっても数限りなく、しかも私は自分が

幼いときどんな顔をしていたのか思い出せなかったし、どんな夢想到にひたっていたのかさえ思  
い起こすことは出来ないのである。私は吸いたくもないのに煙草に火をつけ、噴水の水しぶき  
に目をやった。鎖をつけた犬に散歩させられている少年が、停とまろうとして足をふんばった。  
犬の足が砂利の上で空廻りした。犬は、ぜえぜえと喉のどを鳴らし、なおも前に進もうとした。少  
年は結局根負けして、前かがみになり、犬にひきずられて行った。一瞬、誰だれもいなくなった噴  
水の前にランドセルを背負ってひょこひょこ歩いて行く小学校一年生の私のうしろ姿が見えた。  
見えたというより、あえて私がそこに置いたのかも知れない。私は七歳の私を茜色の宇宙にほ  
つねんとたたずませて見つめた。

入学式の日もちろんは勿論母に手を引かれて私は校門をくぐった。だが翌日も、私は母と一緒に学校  
へ行った。帰りはまた母が迎えに来てくれた。私たち一家は大阪市北区の最西端に住んでいた。  
近所の子供たちは歩いて十五分のところにある小学校に通っていた。それなのに、私がバス通  
学しなければならぬ曾根崎そねざき小学校に入学させられたのは父の意向によってであった。その歓楽  
街のど真ん中に位置する小学校は、北区では最も程度が高く、有数の進学校である高校に入れ  
るルートあふの、最初の出発点だったのである。しかし私は幼い頃からよく迷い子になって、両親  
を慌あわてふためかせたことが幾度となくあったので、はたして無事にひとりでバス通学が出来る  
だろうかというのが、父や母の一番の心配点だった。

「バスに乗っている間は、問題はないやろ。とにかく終点で降りたらええんやから」  
入学式を数日後にひかえた夜、うつらうつらしている私の耳に、酔った父の声が襖越しに聞こえた。

「とにかく、あっちへふらふら、こっちへふらふら行きよるやつやさかい、停留所を降りてからが問題やな。一週間ほど、お前が行き帰り一緒に付いてやれ。なんばあいつでも覚えよるやろ」

「そややなア。一週間も送り迎えしてやったら、なんとか迷わんと、ひとりで行き帰りが出来るようになるやろけど、とにかく曾根崎新地の中やさかい、あっちこっち路地がおまつしやろ？ まっすぐ行くとを右へ曲がったりせえへんやろか。やりかねん子オでっさかいなア」  
「あいつは、なんで右へ行くとを左へ行ってしまうよるんや。あれは何かの病氣やで。何を考えとるんやろ」

「あんたがおんば、日傘で育ててしもたからですがな。そやから、あんな貧乏人のぼんぼんが出来たんや」

貧乏人という言葉が父の癪にさわったようだった。

「人生、どうなっていくか判るか。いまはこんなとこでくすぶってるけど、わしは女房と子どもにひもじい思いをさせてない。お前の言う貧乏人とは何や。えっ、貧乏人とは何やねん」

父の声が荒だった。私は父がまた母を殴らないだろうかと不安になった。母も、しまったと思つたらしく、

「まさか、うちの子を、金持のぼんぼんとは言えまへんがな」

そう小声でとりつくろつた。

「ほう、そしたら、金持とは何やねん。お前、上等の着物を着て、大きな家に住んどつたら、それを金持やと言うんか。貝塚かいづかの嫁はんがうらやましいんやろ」

「もうその話はやめまひょうな。何遍言うたら気が済みますねん」

貝塚とは父の商売仲間で、その男の裏切りが、父の商いをつぶす直接の原因となった。私は両親の毎夜のいさかいが、必ずその貝塚という男の名によって始まることを知っていたので、蒲団ふとんから出ると襖をあけ、

「お父ちゃん、お母ちゃんを殴らんといてや」

と哀願するように言った。しかし父は私を一瞥いちべつしただけで、さらに語気荒くつぶけた。

「貝塚の嫁はんがうらやましいんか。あの狐きつねみたい顔を見てみィ。おしろいつけて紅つけて、おそその横に垢あかつけてっちゅうのは、あんな女のことを言うんや」

「そんな言葉、子供の前で言わんとって」

母は顔をしかめて立ちあがり、私を蒲団に寝かしつけると囁ささやいた。

「早よ、寝なはれ。早寝早起きの癖くせをつけとかと、小学校に行くようになったら困るやろ」

「お父ちゃんと、ケンカせんとしてや」

うんうんと頷<sup>うなず</sup>いて、母は襖を閉めて隣の部屋に戻って行つた。

「バスは大阪駅の向かい側で停まりますわなア。阪神百貨店のちょうど前や。そしたらそのまま御堂筋<sup>みどうすじ</sup>の信号を渡って、曾根崎警察の横の道をまっすぐ行ったら、校門の前に出るんやさかい、なんぼあの子でも、三日も付いて行ってやったら覚えまますやろ」

母は怪しくなつて来た雲行きを変えようとして、話を元に戻した。

「そのまっすぐが、まっすぐ行きよらんから困るんや」

「けつたいな子オやわ」

父が笑つた。私はほつとして、そのまま眠りに落ちたのであつた。

母は入学式の日と、その翌日だけ付いて来てくれた。そして噛<sup>か</sup>んで含めるように、きよろきよろしている私の頭を叩<sup>たた</sup>き、これが阪神百貨店、信号が青になるまで待つてから、この道を渡る。そう言つて、言葉どおりに行動した。

「さあ、渡つたで。この茶色い建物が警察や」

母は私の手を引き、歩道を南へ十メートルほど行つて立ち停まり、細い路地を指差した。

「ひとつめの路地やで。ここを曲がるんや。左へ曲がる。左やで。右と違う。右へ曲がったら車に轢<sup>ひ</sup>かれるで」

「そんなこと判つてゐる」